朝倉時代末期の史実を遺す二、三の石造物

三井紀生

はじめに

一乗谷の朝倉時代の石塔や石仏など石造物は、朝倉氏遺跡調査研究所（現一乗谷朝倉氏遺跡資料館 以下「資料館」と称す）が昭和四十二年（一九六七）に遺跡調査を開始して以来、膨大な数が具体的に報告書に纏められてきたが、現今においてもいまだ新たな石造物に次々接することができる。

筆者は、資料館が中心になって発掘してきたモノや、以外にも現場で直に触れて多くのモノを観てきたが、これらの中から朝倉時代末期に造立された石造物二、三点に新しい情報を加えて紹介しようと思う。紹介する石造物の造立年代は元亀年間（一五七〇年四月～一五七四年七月）、朝倉氏滅亡期の史実の証にもなるモノである。背景を知るため、まずこの頃の動向に触れておきたい。

一　朝倉義景 織田信長の不和と朝倉氏の滅亡

時期は、織田信長と朝倉義景が不和になる永禄十二年（一五六九）に始まる。この年の正月十日、信長は上京、五畿内、近国に威勢を広め、諸国の将を京都へ集めた。そして、朝倉義景にも上京するよう命じたが、義景は家臣と評定を図り上京に応じなかった[1]。このことに関し「是ヨリ義景信長不和ニシテ鉾楯（むじゅん）之根トソ成リニケル」と記し[2]、これが朝倉氏滅亡の根源になったことを示唆している。

この後、朝倉側は信長の越前侵攻あるべしとして、敦賀の手筒山、金ケ崎に二城を作り、木の芽、中河内、椿坂にも防御態勢を敷いた[1]。

翌年の元亀元年（一五七〇）四月二十五日、信長によって敦賀の手筒山城は攻め落とされ、三段崎弥七、冨田中務丞など五百人の戦死者（『信長公記』[3]には「信長頸数千参百七十討取り」と記す）を

出した。[1・2] 翌日信長は金ケ崎城も手中に納めた。しかしこの時はここから先への進攻は義景の一乗谷進発、浅井長政の挙兵を知り退去した。その後姉川の戦いを経て二年後の元亀三年（一五七二）七月、信長は浅井攻めのため小谷城に近い虎御前山に築城、浅井からの要請を受けた義景は二十四日に一乗谷を進発し、八月三日大嶽城に布陣、虎御前山にあった信長とにらみ合いを続けたが、十月十六日信長は木下藤吉郎を残して岐阜へ帰陣、十二月三日義景も大嶽城と丁野城に守備軍を残して一乗谷へ帰陣した。[1・2]

義景の帰陣直後から翌元亀四年（一五七三）初めにかけて、義景は本願寺顕如や武田信玄から帰陣の責めを受け、再出陣を強く要請された。二月十九日には将軍義昭が挙兵、義景は近江志賀表へ出兵要請を受けた。『信長公記』[3] によると翌二十日信長の臣蜂谷頼隆、柴田勝家、丹羽長秀等が近江志賀へ進発している。

三月七日、将軍義昭は信長との和議を拒み、信長を敵に回すことになった。

三月上旬信長が上京、帰りに若狭から敦賀へ向かうであろうとの近江の多胡氏久（左近兵衛尉）の注進で、三月十一日義景は一乗谷を発ち敦賀に向かった。[1・2] 三月十一日の進発に関し、義景が佐々木弥五郎（朽木元網）に宛てた十二日付書状に「就　公方様被立御色殿中祇候之旨 尤神妙候 殊路次之儀可有御入魂由 御誓言之旨得其意候 先以快然候 仍昨十一令出□[馬]候 浅井与示合子細候 於其上可得上意候 無異儀之様子被相談御警固肝要候 委細鳥居兵庫助高橋新介可申候 恐々謹言　三月十二日　義景（花押）　佐々木弥五郎殿 進之候」[4] と記されており、元網による道中通行安全の配慮あって三月十一日に進発したとしている。

義景は敦賀では中山に築城、兵卒の配置など守備固めを指揮して五月十日一旦一乗谷へ帰陣した。[1] しかし、この頃の兵卒について「如此年中ニ四五度出陣スル程ニ、諸卒疲労シ倦テ世ヲ秋風之心地シテ思之露モ重ナリ、民ノ草落モ枯々ニ野モセニ、スタク虫ノ音モ歎之色ヲ顯シケルニ」と形容して疲労困憊ぶりを記している。[1・2]

このような状況の中で七月十七日にまた浅井からの要請による出陣となり、この時は朝倉景鏡や魚住備後守は兵卒の疲労を理由に出陣に加わることを辞退している。[1・2]

そこで、義景自身が他の国中の軍勢を集めて湖北へ進発したが、八月十三日から十四日朝にかけての戦いで朝倉軍は越前と近江の国境の刀禰坂で織田軍に大敗、朝倉掃部助、山崎長門守、鰐淵将監吉廣、斎藤龍興など歴々の多くの武将が討死した。[1・2]

義景は数人の武将と一乗谷へ逃げ帰ってきたという。義景は一乗谷から撤退し、越前大野へ逃げ延びたが、景鏡の謀反によって八月二十日自刃した。また、八月十八日の夜明けから二十日にかけて一乗谷の館を始め家々仏閣は悉く焼き払われすべて塵灰と化した。

二　史実を遺す石造物（いずれも笏谷石）

（一）手筒山の戦い戦死者供養塔

一乗谷の奥、鹿俣（かなまた 現福井市鹿俣町）の最勝寺（天台宗）

の前に所在する大型の宝篋印塔の周りに石仏や石塔の残欠を集めているが、この中に前述の手筒山の戦いで戦死した人々を供養するために建てられた石塔（笠塔婆の塔身と推定）が遺存している。

笏谷石の石造物の調査を始めて間もない平成三年（一九九一）七月に当寺を訪れてこの塔の所在を知り、他例のない石造物として注目してきた。法量は、幅と奥行きが二十八センチ、高さ九十二センチである。また平成三十一年（二〇一九）三月、周辺にこの塔の一部分を構成していたと推定される笠（幅・奥行五十三センチ、高さ二十二センチ、笠の下端中央に、塔身上端の枘が合致する寸法の枘穴を有する）の所在も確認した。

この塔身については、筆者が知る以前に山本昭治氏（故人）が所在を確認し氏の私家版の著書[5]に掲載、資料館がこの情報を得ていることも確認した。また山本氏が著書に記述している塔身側面に彫られている仏像名などを一部修正する必要があることも判明した。

塔身側面の四面中、一面は上側のみに、外三面は各面とも上下に舟形光背を彫り、中に仏像（上側立像、下側坐像）を彫っている。次に、一像と紀年銘を彫る面を前面として、各面の彫像と銘文を示す（〈　〉は舟形光背、内は彫像名）。

手筒山合戦戦死者供養塔
最勝寺（福井市鹿俣町）
1991年7月撮影

前面　「元亀元庚午四月廿五日越劔敦賀郡天筒山米□□□」
〈釈迦如来立像（地蔵）〉「釈迦像 冨田彦（以下欠落）」
「・・・・爲自他討死乃至法界皆倶成仏之也」[6]

左側面　〈観音菩薩立像カ〉〈虚空蔵菩薩坐像〉「吉村又久郎」

背面　〈地蔵菩薩立像〉〈大日如来坐像（観音）〉「大□《屋》小七郎妙忠灵位」

右側面　〈文殊菩薩立像（観音）〉〈薬師如来坐像（地蔵）〉「□□覺禅定門」

（　）内は、山本氏の著書[5]に記述されている像名

この戦いは前述の如く『信長公記』[3]にも記述があり、戦いの史実を刻む貴重な現物遺品である。

（二）「願主景頼」銘を刻む石仏

平成二十五年（二〇一三）、美山公民館が実施した福井市美山地区（旧美山町）の五十二神社の所蔵物の悉皆調査に加わった。この時、刻銘を「願主景頼　元亀四年三月十一日」と刻む不動明王一体、千手観音四体および紀年銘は不詳だが像の造形が同類の千手観音二体、合計七躰の遺存を白山神社二社（福井市 三万谷町（以下三万谷）および同市 宇坂別所町（以下宇坂別所））において確認し『みやまの神社信仰のすがた』[7]に掲載した。

不動明王
白山神社（三万谷町）

千手観音坐像
白山神社（三万谷町）

千手観音立像
白山神社（宇坂別所町）

三万谷も宇坂別所も一乗城山の東麓にある集落で、朝倉時代は関連する寺院が所在していたと伝える地でもある。資料館による一乗谷の石造物調査の際、三万谷白山神社の六躰は遺存が確認され、うち紀年銘を有する四躰と同じ時期に確認された東郷の三社神社（福井市小路町）所在の一躰が調査報告書[8]に掲載されている。

その後、各地の調査が進み「願主景頼」銘を刻む千手観音は一乗谷朝倉屋敷跡松雲院（後に心月寺へ移動し、現在は資料館蔵）、永昌寺（福井市東郷二ケ町）などでも遺存が確認され、広い範囲に分散していることが判明した。

以上の像の形態は、圭頭型の板材に像を浮き彫りし、千手観音は立像と坐像の二種類、平均的な法量は全高が六十八センチ、最下部の基礎幅三十二センチ、顔面付近の幅三十五センチ、像高は立像四十二センチ、坐像三十センチである。なお不動明王像（立像）は千手観音より大型である（**資料1**参照）。

銘文はいずれも共通で、像の右側（対向）に「願主景頼」左側に「元亀四年三月十一日」と刻んでいる。この紀年銘は、本稿の最初に「朝倉義景 織田信長の不和と朝倉氏の滅亡」の節で記したように刀禰坂の戦いの年に義景が佐々木弥五郎の道中安全確保の支援を受けて一乗谷を進発した日であり、景頼も重臣の一人として従軍した。

『越州軍記』[1]に刀禰坂の戦いで戦死した朝倉掃部助の奮闘する記述がみられるが、掃部助が誰であるかは諸本により異なっている。越州軍記は官途掃部助のみ、春日神社本[2]と松平文庫本は掃部助景氏[9-1]、大徳寺文書は景契[9-1]と記述している。

この度、史実を語る新しいモノが確認されたことによって、この場に登場している朝倉掃部助は、実は掃部助景頼であったとするのが適切であろう（系図参照）[10]。

次に、これらの石仏は当初はどこに所在していたのであろうか。筆者は一乗城山山頂付近ではないだろうかと狙いをつけていた。そこで最も多く遺存している三万谷の白山神社所在の六躰がどこにあったのかを知る手がかりを求めて、令和二年（二〇二〇）二月初め旧知の三万谷の古老を訪ねた。「山の上から下ろしたと伝え聞いている」と。そして「全部下ろせなかったので山中にまだあるはず」と貴重な情報を得、後日その場所を教えて頂けることになった。

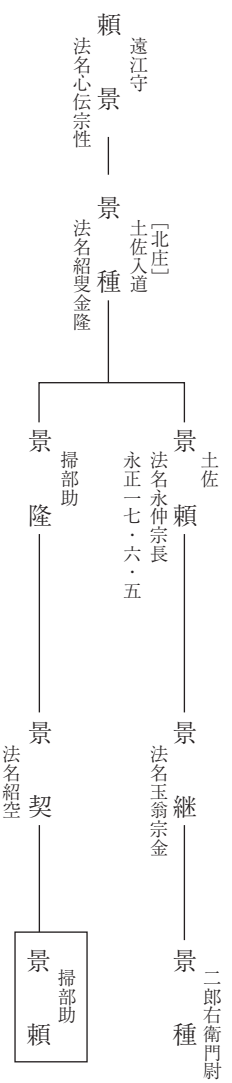
この情報によって、最初に安置された場所は一乗城山と推測していたことに現実味がでてきた。しかし古老が言う山中に遺存していても、それらが本当に山頂にあった物的証拠を確認する必要があった。過去に一度だけ一乗城山へ登ったことがあり、石仏の残欠が所在していたことは知っていたが、残念ながら当時は苔むした残欠は気にも留めていなかった。

令和二年は一月から降雪がなかったので、二月二十四日の好天の日に自分が住まいする集落の一人に随行を頼んで一乗城山へ登り、山頂の「千畳敷」「観音屋敷」と呼ばれる地にあった苔むした残欠の苔を除去して調査を行ったところ、六躰の千手観音の残欠（うち四躰に在銘）と類似造形の如意輪観音像（無銘）一躰を確認できたのである。

城山における遺存の確認によって、麓に所在する「願主景頼」を刻む石仏は、当初は一乗城山に安置されていたことにほぼ間違いないという確信を得ることができた。

さらに二月二十六日、三万谷の古老の案内で三か所を調査し、城山二の丸の下三万谷側美山林道が通る近くの山林内に一躰、三万谷林道と美山林道の合流点付近にある堂（地蔵堂と仮称）に二躰、三万谷の民家裏山に個人が管理している祠に二躰合計五躰を確認した。

令和二年三月時点で、確認された仏像は不動明王一躰、千手観音



遠江守系図

一乗城山の石仏の残欠

二十一躰、同じ造形で法量が近似の如意輪観音一躰 合計二十三躰である。これまでは西国写し三十三観音の一部と想定して調査を進めてきた。そうであれば千手観音は十五躰だけで、他は十一面、如意輪、聖観音などであるが、今回の結果からそうではなかったことも判明した。千手観音像は以上の他にもまだどこかに遺存しているのかもしれない。

元亀四年（一五七三）三月十一日、信長軍との合戦に出陣するに当り、一乗城山に数多く造立した石造の千手観音や不動明王の前で、朝倉掃部助景頼は何を祈願して戦地に赴いたのだろうか、これらの「仏のみぞ知る」である。

朝倉時代、一乗山上に七尺余の千手観音が祀られていたと記述す

残欠中の１体

手を頭上に置く「清水型」

造形が類似の如意輪観音

一乗城山に遺存の石仏

る史料が遺されていた。千畳敷や観音屋敷との関連の有無などは記述がないので更なる調査が必要だろうが、情報として留めておく。

『越前国名勝志』[11]によると 曹洞宗 福聚山鎮徳寺[12]に一乗谷の山上（観音屋敷や観音堂の記述はないが）から下山したと伝える千手観音に関する次の記述がある。「亦 当寺ニ大仏の十一面千手観音坐ス、是ハソノ昔一乗ノ谷ノ山ノ上ニ坐シケルニ、今ハ此ノ寺ニ奉安置、霊験新ナル観音也　御長七尺余ノ坐像ナリ」とある。

また、『鎮徳寺由緒書』[13]によると「文化六年（一八〇九）寺院の火災によりこの千手観音像は類焼し、文化八年（一八一一）丈六の像が再建された」と記述している。

（三）一乗谷に珍しい六地蔵

「願主景頼」の石仏を調査する過程で新たな六地蔵に出会ったので、本稿の紙面を借りて紹介しておこう。

三万谷林道は一乗谷の入口安波賀（福井市安波賀町）へ通ずる古道の幅を広げて造成された道である。現状は尾根で美山林道に合流して南へ凡そ五十メートルほど進むと地蔵堂があり、地蔵堂の前から朝倉時代以来の古道が遺り、九折（つずらおり）と呼ばれる屈曲を経て安波賀地籍の武者野（むしゃの）へ至る。天正元年（一五七三）八月十六日、義景が一乗谷から大野へ落延びる時に通った道と伝えている。武者野は国道一五八号線の三万谷トンネルの福井市街側入り口付近で足羽川左岸に位置し、朝倉時代は野（火葬場）であったという。

尾根の地蔵堂には前述の千手観音の外に、像高九十一センチの釈迦如来（永正九年〈一五一二〉銘）と六地蔵の片割れ三躰などを納めている。六地蔵は光背を有し、総高九十三センチ、像高は三躰とも六十三・五センチ、三躰の地蔵の持物は、念珠、宝珠と施無畏印、合掌である。銘文が刻まれており、三像の中にはワレや欠落により不明部分もあるが、いずれも同じ銘文で、像の右側（対向）に「爲慶範大徳」、左側に「施主 東訓 永禄六八月十三日」と刻む。

昭和五十八年（一九八三）、国道一五八号線改良工事前に資料館によって武者野の発掘調査が行われ、三躰の地蔵の所在を確認、うち二躰は前記地蔵堂の三躰と同じ「東訓」銘を刻んでいるという。[14]

武者野遺跡の地蔵

地蔵堂（仮称）の地蔵

筆者が実見した一躰は、光背の肩から上と頭部が欠落しているが、銘文が遺されており右側「（欠落）大徳」、左側「（欠落）東訓永禄六八月十三日」が確認できる。なお持物は確認不能であった。

六地蔵は旧道の尾根（峠）あるいは武者野入口のいずれかに六躰揃って所在していたと想定されるが、いずれにせよ筆者は一乗谷において朝倉時代の六地蔵の所在は未だ知らず、多くの石仏が遺存する中でも珍しい存在と言えるだろう。

おわりに

福井市美山地区の神社調査に従事して以来、「願主景頼」銘を刻む石仏の数や当初の所在地が何処であったのか常に気になり、何とか明らかにしたいと思っていた。

一乗城山の千畳敷や観音屋敷に遺る苔むした石仏の残欠、美山林道沿いの地蔵堂（仮称）や山中の調査および関連して武者野の六地蔵調査に赴いた令和二年（二〇二〇）二～三月は体調の異常を感じていたが、それでも何とか目標とした場所の現場調査と資料整理を終えることができ、気懸りにしていた事はほぼ明らかになったと思っている。

私事ながら、その後本稿作成に着手しようとした四月頃から体調が日を増して悪化し、五月下旬に精密検査の結果急性リンパ性白血病と診断され、即日入院し、年末まで長期の入院療養を余儀なくされた。幸いにも、病院の手厚い治療と看護、家族の支援のお陰で大きな問題もなく、病は順調に快方に向かって行ったので、本稿を仕上げることができた。感謝の意を申し上げる次第である。

謝辞

現場調査にあたって、小竹原悟氏（三万谷町）に現場案内を、調査作業には田中昌治氏（西河原町）の支援を頂いた。また、一乗谷朝倉氏遺跡資料館から資料提供を、同館主任（学芸員）宮永一美氏から助言を頂いた。衷心より謝辞申し上げる。

註

（1）前田育徳会蔵写本『朝倉始末記一、二（「加越闘諍記一、二」）』『朝倉始末記三～六（「越州軍記一～四」）』（井上鋭夫・桑山浩然・藤木久志校注『蓮如一向一揆（続・日本仏教の思想4　日本思想体系新装版）』岩波書店、一九九五年）

（2）『朝倉記』春日神社本（『越前・若狭一向一揆関係資料集成』越前・若狭一向一揆関係文書資料調査団編、福井県教育委員会、一九八〇年）

（3）桑田忠親編集・校注『新訂信長公記』人物往来社、一九九七年

（4）宮永一美「資料紹介Ⅱ　新出の朝倉義景書状について」（『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要　二〇一七』福井県立一乗谷朝倉氏資料館、二〇一九年）

（5・6）山本昭治『越前の石像美術』私家版、一九九一年。この部分の現物の銘文は判読困難であったため、本書に記録している銘文一部を参考にした。

（7）三井紀生『みやまの神社信仰のすがた　五二神社の悉皆調査から』福

井市美山公民館、二〇一五年、一八頁。七躰の内訳は、白山神社（福井市三万谷町）に六躰（千手観音五躰、不動明王一躰、内四躰に「願主景頼」の銘を刻む）、白山神社（同市 宇坂別所町）に千手観音一躰（在銘）。

（8）『一乗谷石造遺物調査報告書Ⅰ　銘文集成』福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所、一九八〇年）

（9―1）註（1）『朝倉始末記五（越州軍記三）』に記述している校注に「朝倉掃部助　景氏（松平文庫本）。景契（大徳寺文書）」と記す。

（9―2）松平文庫『朝倉始末記』（福井県文書館保管）「朝倉掃部助景氏」と記す。

（10）松原信之『越前朝倉一族』新人物往来社、一九九六年、一八三頁および巻末の年表（引用）による。

（11）竹内芳契（寿庵 ?～宝暦五年〈一七五五〉）『越前国名勝志』元文三年（一七三八）成立（『越前若狭地誌叢書 上』杉原丈夫・松原信之共編、松見文庫、一九七一年）

（12）福聚山鎮徳寺（福井市日の出一丁目）　天正二年（一五七四）一向一揆で諸堂全て焼失した永平寺の十九世祚久が宝物を携帯して北庄（福井）に逃れて一宇を建立し、新永平寺とした。信長による一揆平定後永平寺は旧地に帰って再建され、新永平寺は祚久の弟子祚天に与えられ、鎮徳寺と改名された。（『近江・若狭・越前寺院神社大事典』平凡社、一九九七年）

（13）「鎮徳寺由緒書」（『一乗谷の宗教と信仰（第一〇回企画展）』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館、二〇〇五年）

（14）『武者野遺跡　国道一五八号線改良工事に伴う事前調査報告』福井県立朝倉氏遺跡資料館、一九八六年）

資料１　一乗谷の気になる二、三の石造物目録

一　手筒山の合戦戦死者供養塔

No	現所在地 名称	現所在地 場所	塔の種類	法量 (cm)		銘文 特徴	備考
1	最勝寺	福井市 鹿俣町	笠塔婆カ	幅	28.0	前面 「元亀元庚午四月廿五日越劦敦賀郡天筒山米・」 ＜釈迦立像＞「釈迦像 冨田彦（以下剥離）」 「・・爲自他討死及至法界皆倶成仏之也」 左　＜観音カ＞＜虚空蔵＞「吉村又久郎」 背面＜地蔵＞＜大日＞「大□(屋)小七郎妙忠灵位」 右　＜文殊＞＜薬師＞「□□□覺禅定門」	＜＞は舟形光背と安置仏像名を示す 周辺に、本塔用の笠と思われる遺品所在
				奥行	28.0		
				高さ	87.0		
				法量は塔身			

二　「願主景頼」の石仏

No	現所在地 名称	現所在地 場所	塔の種類	法量 (cm) ＊印 残存寸法		銘文 特徴	備考
1	白山神社	福井市 宇坂別所町	千手観音 立像	像高	41.2	右「願主　景頼」 左「元亀四年三月十一日」	圭頭欠落
				幅	32.2		
				総高	＊54.0		
2	白山神社	福井市 三万谷町	不動明王 立像	像高	55.7	右「願主　景頼」 左「□亀四年三月十一日」	圭頭前面欠落
				幅	41.0		
				総高	88.0		
3	同上	同上	千手観音 立像	像高	42.0	右「□主　景□」 左「□□四□三月十一日」	圭頭前面欠落
				幅	32.5		
				総高	65.0		
4	同上	同上	千手観音 坐像	像高	30.0	右「願主　景□」 左「判読不能」	圭頭・基礎前面 欠落
				幅	33.0		
				総高	65.5		
5	同上	同上	千手観音 坐像	像高	推定 32.0	判読不能	頭頂部から上欠落 および基礎前面 欠落
				幅	34.5		
				総高	＊54.0		
6	同上	同上	千手観音 坐像	像高	推定 30.0	判読不能	圭頭前面、像右側 および基礎前面 欠落
				幅	33.0		
				総高	＊64.0		
7	同上	同上	千手観音 坐像	像高	＊25.0	右「願主　景（以下欠落） 左「元亀四年三月十（以下欠落）	像の胴中央部 から下欠落
				幅	33.5		
				総高	＊36.0		
8	三社神社	福井市 安原町	千手観音 坐像	像高	＊28.0	右「願主　□頼」 左「元亀四年三月十一日」	上下欠落
				幅	32.0		
				総高	＊44.5		
9	永昌寺	福井市 東郷二ケ町	千手観音 立像	像高	42.3	右「願主　景頼」 左「元亀四年三月十一日」	圭頭右前欠落
				幅	32.0		
				総高	69.0		
10	一乗谷 朝倉氏 遺跡資料館	福井市 安波賀町	千手観音 立像	像高	42.5	右「願主　景頼」 左「元亀四年三月十一日」	圭頭前面と右上 欠落
				幅	33.0		
				総高	67.0		
11	同上	同上	千手観音 坐像	像高	28.5	右「願主景頼」 左 判読不能	像の左側が圭頭 から基礎まで欠落 全面風化進展
				幅	33.0		
				総高	66.0		
12	千畳敷・ 観音屋敷	福井市 一乗城山	千手観音 立像	像高	＊41.5	右「願主景頼」 左「…三月十一日」	頭頂から上欠落 像の胴周辺で上下 2分割、基礎左欠落
				幅	32.0		
				総高	＊56.5		
13	同上	同上	千手観音 坐像	像高	＊28.0	右　判読不能 左「(上欠落)　三月十一日」	圭頭・像頭部欠落 左側上・右側下各 半分と基礎欠落
				幅	膝 34.0		
				総高	＊61.0		

二　「願主景頼」の石仏　（続）

No	現所在地 名称	現所在地 場所	塔の種類	法量(cm) ＊印 残存寸法		銘文 特徴	備考
14	千畳敷・観音屋敷	福井市一乗城山	千手観音立像	像高	未計測	右　欠落 左「(欠落)　十一日」	膝から下のみ残存 基礎前面欠落
				幅	33.0		
				総高	＊25.0		
15	同上	同上	千手観音立像	像高	未計測	銘文確認不可	膝から下のみ残存 基礎前面欠落 全面風化進展
				幅	33.0		
				総高	＊30.0		
16	同上	同上	千手観音立像	像高	＊24.5	銘文確認不可 最上の左右２臂頭上高く掲げ化仏を戴く 調査範囲唯一の「清水型」の千手観音	腰から上のみ残存 顔面欠落 圭頭前面欠落
				幅	頭部35.0		
				総高	＊37.0		
17	同上	同上	千手観音立像	像高	＊29.0	右「景頼」 左　欠落	右側胸下の残欠のみ残存
				幅	最大19.5		
				総高	＊45.0		
18	同上	同上	如意輪観音坐像	像高	＊25.5	銘文確認不可	上・下欠落 法量、造形は千手観音と類似
				幅	蓮台部33.0		
				総高	＊48.0		
19	美山林道沿山林中	福井市三万谷町	千手観音立像	像高	＊34.0	銘文確認不可	上下左右欠落
				幅	＊33.5		
				総高	＊48.0		
20	個人蔵	同上	千手観音立像	像高	41.0	右「願主　景頼」 左「元□四□□月十一日」	完形
				幅	32.0		
				総高	68.5		
21	同上	同上	千手観音坐像	像高	32.0	右「願主　景頼」 左「元亀四年三月十一日」	圭頭前面欠落
				幅	30.0		
				総高	67.5		
22	旧道脇地蔵堂	同上	千手観音坐像	像高	30.0	右「願主　景頼」 左「元□四年三月十一日」	圭頭前面および台座前面欠落
				幅	33.5		
				総高	65.0		
23	同上	同上	千手観音立像	像高	＊36.5	右「願主景（以下欠落）」 左「元亀・・（以下欠落）」	頭頂部から上・膝から下欠落
				幅	顔面＊34.5		
				総高	＊36.5		

三　一乗谷に珍しい六地蔵　（6躰中4躰）

No	現所在地 名称	現所在地 場所	塔の種類	法量(cm) ＊印 残存寸法		銘文 特徴	備考
1	旧道脇地蔵堂	福井市三万谷町	地蔵立像	像高	63.5	右「□慶範大徳」 左「□主東訓永禄六八月十三日」 持物　念珠	首部で上下（光背共にワレ補修
				幅(基礎)	35.0		
				総高	93.0		
2	同上	同上	地蔵立像	像高	63.5	右「爲慶範大徳」 左「施主東訓永禄六八月十三日」 持物　左 宝珠・右 施無畏印	頭前部一部欠落
				幅(基礎)	35.0		
				総高	93.5		
3	同上	同上	地蔵立像	像高	63.5	右「(欠落）大徳」 左「施主東訓永禄六八月十三日」 持物　合掌	最上部から左肩横にかけて光背欠落
				幅	基礎欠落		
				総高	＊87.5		
4	武者野遺跡路傍	福井市安波賀町	地蔵立像	像高	＊53.0	右「(欠落）大徳」 左「(欠落）東訓永禄六八月十三日」 持物　不詳	首から上、頭と光背欠落
				幅(基礎)	34.5		
				総高	＊71.5		

資料２　　石仏写真集

「願主景頼」の石仏

No.	名　称	千手観音　立像
1	現在の所在地	白山神社 宇坂別所町

No.	名　称	不動明王　立像
2	現在の所在地	白山神社 三万谷町

No.	名　称	千手観音　立像
3	現在の所在地	白山神社 三万谷町

No.	名　称	千手観音　坐像
4	現在の所在地	白山神社 三万谷町

No.	名　称	千手観音　坐像
5	現在の所在地	白山神社 三万谷町

No.	名　称	千手観音　坐像
6	現在の所在地	白山神社 三万谷町

No.	名　称	千手観音　坐像カ
7	現在の所在地	白山神社 三万谷町

No.	名　称	千手観音　坐像
8	現在の所在地	三社神社 安原町

写真提供；一乗谷朝倉氏遺跡資料館

No.	名　称	千手観音　立像
9	現在の所在地	永昌寺 東郷二ケ町

「願主景頼」の石仏（続）

No.	名　称	千手観音　立像
10	現在の所在地	一乗谷朝倉氏遺跡資料館 安波賀町

もと 心月寺蔵

No.	名　称	千手観音　坐像
11	現在の所在地	一乗谷朝倉氏遺跡資料館 安波賀町

No.	名　称	千手観音　立像
12	現在の所在地	千畳敷・観音屋敷 一乗城山

No.	名　称	千手観音　坐像
13	現在の所在地	千畳敷・観音屋敷 一乗城山

No.	名　称	千手観音　立像
14	現在の所在地	千畳敷・観音屋敷 一乗城山

No.	名　称	千手観音　立像
15	現在の所在地	千畳敷・観音屋敷 一乗城山

No.	名　称	千手観音　立像
16	現在の所在地	千畳敷・観音屋敷 一乗城山

No.	名　称	千手観音　立像
17	現在の所在地	千畳敷・観音屋敷 一乗城山

No.	名　称	如意輪観音
18	現在の所在地	千畳敷・観音屋敷 一乗城山

「願主景頼」の石仏（続）と六地蔵

No.	名　称	千手観音　立像
19	現在の所在地	山中 三万谷町

No.	名　称	千手観音　立像
20	現在の所在地	個人蔵 三万谷町

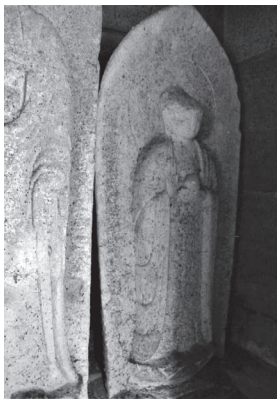
No.	名　称	千手観音　坐像
21	現在の所在地	個人蔵 三万谷町

No.	名　称	千手観音　坐像
22	現在の所在地	旧道脇地藏堂 三万谷町

No.	名　称	千手観音　立像
23	現在の所在地	旧道脇地藏堂 三万谷町

No.	名　称	六地蔵　持物 念珠
1	現在の所在地	旧道脇地藏堂 三万谷町

No.	名　称	六地蔵　持物 宝珠
2	現在の所在地	旧道脇地藏堂 三万谷町



No.	名　称	六地蔵　合掌
3	現在の所在地	旧道脇地藏堂 三万谷町

No.	名　称	六地蔵　持物 不詳
4	現在の所在地	武者野路傍 安波賀町